



第171号

発行所 社団法人 芝蘭会 京都大学医学部同窓会 〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町 TEL 075-751-2713 FAX 075-752-4015 E-mail: info@shirankai.or.jp http://www.shirankai.or.jp

主な内容

- ② 退任あいさつ 新任あいさつ
③ 平成22年度臨牀懇話会
④ 校友会・KMS・FUNDだより
⑤ 震災への救援物資に感謝
⑥ 支部分より東京・神戸・和歌山
東日本大震災カンパのお願い
芝蘭会理事会・評議員会・臨時総会
人事異動・会員訃報

スタッフと力合わせ
さらなる飛躍めざす

就任あいさつ



京大病院病院長 二嶋理晃

このたびの東日本大震災で被災された多くの方々に心よりお見舞い申し上げます。その中には、芝蘭会会員の方々もおられます。皆さまのご苦勞には計り知れないものがあると存じますが、京大病院では今後も、多方面からの援助を全力で継続させていただきます。また、東日本大震災の救援に携わっておられる多くの芝蘭会会員の方々に、敬意を表したいと存じます。

私は、昭和52年医学部

卒業後、京都大学胸部疾患研究所臨床生理学に入局。兵庫立塚口病院勤務を経て、昭和61年より京都大学胸部疾患研究所講師・助教として勤務。平成10年の改組に伴った京都大学医学部附属病院理学療法部への転任を経て、平成12年より呼吸器内科学教授を務めてまいりました。今年の4月より、中村孝志先生の後任として京大病院病院長に就任しました。芝蘭会の皆さまにこの場をお借り

してごあいさつをさせていただきます。いただいたと存じます。

まず、執行部のメンバーをご紹介します。副院長として、診療担当・坂田隆三教授、経営担当・稲垣暢也教授、研究教育担当・上本伸二教授、医療安全・一山智教授の4人、院長補佐として、吉原博幸教授、平家俊男教授、坪山直生人間健康科学科長、秋山智弥看護部長、加藤健事務部長の5人、私を含めて10人の陣容です。

私どもは、京大病院の掲げている三つの目標すなわち、「患者中心の開かれた病院として安全で質の高い医療を提供する」、「新しい医療の開発と実践を通じて、社会に貢献する」、「専門家としての責任と使命を自覚し、人間性豊かな医療人を育成する」の実現を引き続き目指し、

努力したいと思っております。具体的な抱負を申し上げます。まず、経営的観点から、平成21年度までは毎年5億円の赤字でしたが、平成22年度には収支が均衡するまでになりました。昨年、手術料の増加を含む保険点数改定が追い風となったことは確かです。しかし、昨年は積

このたびの東日本大震災により被害を受けた皆さまに心よりお見舞い申し上げます。同時に、被災地域の一日も早い復興をお祈りいたします。

東日本大震災の被災者に心からお見舞い申し上げます
芝蘭会会員への支援協力をお願い

中で犠牲となられた方はいないようですが、特に大津波により壊滅的な被害を被った地区には避難を余儀なくされた数名の先生方がおいでになります。こうした中、芝蘭会では3月18日に岩手県、宮城県、福島県、茨城県地域にお住まいの会員の方にお見舞いの手紙を出し、会員の方の被害の状況把握と芝蘭会としてできる可能な支援について申し出ていたしました。(2面に全文別掲)

すでに、医学研究科では「東日本大震災基金」を設置して教職員へ寄附の呼びかけを行っております。また、附属病院では災害医療チーム(DMAT)を派遣するとともに被災地の重症患者の受入体制の検討も行われております。

情報・ご意見は下記芝蘭会事務局へ
Tel.075-771-0958/075-752-4013 Fax.075-752-4015
E-mail: info@shirankai.or.jp

被害の規模からして復旧・復興の取り組みも長期にわたるものと推測されます。芝蘭会といたしましても京都大学医学部、附属病院と連携し、できる限り支援をいたす所存です。この「芝蘭会」会員の皆さまのご支援、ご協力を心からお願ひ申し上げます。



さらなる拠点形成は医学研究科内の「メディカルイノベーション推進室」が推進して行きます。

近年の医学の進歩にかかわらず未だに有効な治療法のない疾患は多く、これらに対して新規薬物を創出することは医学の使命の一つです。しかし、これまで、薬作りは製薬企業に任されて来ましたが、ところが現在、多くの製薬企業は、創薬の効率低下に苦しんでおり、その打開策の一つとして、大学医学部と企業が共同で医学研究と臨床知見を積極的に創薬に活かすオープンイノベーションの試みが始まっています。

京都大学医学研究科では、平成19年より創薬の産学官連携モデルとしてアステラス製薬株式会社と「次世代免疫制御を目標する創薬医学融合拠点」(略称「AKプロジェクト」)を実施し、イコール・パートナーシップに基づ

また、プロジェクト経費で優秀な若手医師・研究者を雇用し彼らが創薬の現場に参画することで新時代の医学研究者・創薬マネジャーの育成を行ないます。

メディカルイノベーションセンター
医学研究科に設置
産学が連携して創薬

このたび、医学研究科では前記実績を基に産学連携による創薬活動をさらに発展させるため、昨年12月、オープンイノベーションを推進して創薬

以上申しましたように、京大病院には多くの克服すべき課題があります。しかし、私は心配していません。それは、京大病院の各診療科が一流のスタッフ陣から構成され、優秀なメディカルスタッフ、事務職員がおられるからです。皆さまが力を合わせて京大病院のさらなる飛躍を目指すということで、私の新任のあいさつとさせていただきます。

退任あいさつ

本年3月末に京都大学を退任し、4月1日より独立行政法人国立病院機構京都医療センター病院長に就任いたしました。京都大学医学部在職中に皆さまから賜りましたご厚情に心より御礼申し上げます。

私が京都大学医学部教授に就任いたしましたのが平成7年2月1日であり、阪神淡路大震災の2週間余り後でありました。今回、定年まで2年を残しての退任直前の3月11日に東日本大震災にみまわれ、未曾有の地震と津波、そして原子炉事故と時代が変わる時に退任となることに、偶然とはいえ感慨深いものがあります。

京都大学医学部整形外科学教室は1906年に創設され、私は七代目の教授になります。従って在任中に教室開講百周年を迎え、関係者にお集まりいただき、祝賀会を京都大学百周年時計台記念館で開催することができました。また、翌年には日本整形外科学会を主催し、在任16年の中でも印象に強く残ったものでした。この際は教室の歴史を顧みる機会となり、創設期

や戦中戦後の混乱期での苦勞はいかばかりであったかという思いを強く持ちました。

そして、現在の整形外科の課題も教室員一丸となれば打破できるはずと勇気づけられるものでした。

教室の臨床は専門領域に別れて進めてきました。それぞれ別の専門領域での研究は新しい人工股関節や膝関節の開発、高位頸椎の解剖と術式、吸収性材の開発と応用、骨壊死に対する新しい治療、骨軟骨移植術の改善など各領域の担当医の奮闘で進めることができました。

4月よりの京都医療センター院長の職は、役割の異なる病院での勤務であり、一からの勉強と考える必要があります。これからも芝蘭会員の皆さまにはいつそご支援をお願いして、退任の挨拶とさせていただきます。

さらなる運動器疾患の克服を願って

独立行政法人国立病院機構
京都医療センター病院長

中村 孝志



教授就任後から新研修医制度ができるまでの10年間は入局者が順調にあり、大学と関連病院の連携した研修システムもうまく機能して、優れた人材が育ってきました。悩みは、これから病院で活躍を期待された方々が開業により人事から離れていくことでした。一方、新研修医制度が始まったこの6年間は、大学離れの傾向が顕著となり、入局者の獲得、大学と関連病院との関係の見直し、研修医教育システムの構築など、試行錯誤の連続でした。一介の整形外科の教授には何ともしがたいという感じにとられることもありましたが、しかし、京都大学はマ

新任あいさつ

平成23年4月1日付で、医学研究科医学教育推進センターの教授に就任いたしました小西靖彦です。同時に京都大病院の総合臨床教育・研修センターで、医師臨床教育・研修部長を兼務していただきます。芝蘭会の皆さまにごあいさつ申し上げますとともに、今後のご指導とご協力をお願いいたします。

私は昭和57年に京都大学を卒業し、外科学講座に当時で云々「入局」をしました。関連病院で研修のうちに、生体肝移植の開始直前で熱気に満ちた小澤和恵教授の大学院に

進みました。カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)に留学し、肝移植手術に入り患者さんの周術期ケアに携わりながら、臨床研究を続けたのが良い思い出です。卒後のレジデント(日本の初期+後期研修医の感覚です)と医学生がチームになっていわゆる屋根瓦式の教育回診を行っています。最も感銘を受けたのは、学生の熱心な態度でした。

帰国後は、大阪市にある済生会泉尾病院に赴任しました。たまたま30代前半で外科の主任医長になり、自身で手術と診療の責任を負うすばらしさと厳しさを学びました。当時は自分のことに一生懸命で後進を育てる余裕がありませんでしたが、数年後に副院長となり管理者の道を歩みだしてから医学教育学会に属しています。済生会には全国で80病院(うち臨床研修病院は40余)あります。平成16年の臨床研修必修化を契機に、全国済生会で研修病院協議会を立ち上げ、私もその委員になりました。平成21年から

医師の生涯学習必要

京都大学大学院医学研究科
医学教育推進センター 教授

小西 靖彦



強みがあります。まず、優秀な関連病院です。日本の卒業後医学教育は、平成16年の臨床研修必修化を契機に大きく変化しました。大学と臨床研修病院を対立軸として描き、「勝ち負け」が話題になりがちですが、学生から研修医、さらには専門医から指導医へと医師の生涯学習には終わりもありません。学生から指導医まで一貫して医師を育てるために、大学と病院との協力体制の構築は重要な課題です。

大学と関連病院には素晴らしい医学者・医師がおります。学生と研修医は医学や医療の世界で先輩の後ろ姿を見て成長します。プロフェッショナルリズムを身に付け行動変容する様は、時代が移れども変わりません。皆さんの力をお借りして、若い人たちの成長を助けるのが私の仕事です。大学には、教育・研究・臨床の柱があります。教育については、その業績評価の仕組みが必須です。教授会を中心にそれを作るプロセスが重要だと考えます。

京都大学には、「自由の学風」があります。一方、自由には重い責任を伴います。京都大学の学生・研修医諸君は、京都大学で学べることの意義を再度確認し、自律的に学習する習慣を身に付けることが重要です。私たちは学習の支援を積極的に行います。

地域医療連携を考える 京大病院臨床懇話会 学内外から115名参加



講演を行う田中 誠先生



挨拶を行う中村病院長

平成23年3月13日、「平成22年度京大病院臨床懇話会」が芝蘭会館で開催され、学内外から115名の参加がありました。

同懇話会は、地域医療との連携を推進するため、地域で活躍されている医師等の先生と京大病院診療科長等との意見交換及び京大病院からの情

このたびの東北地方太平洋沖地震により甚大な被害を受けた地域にお住まいの芝蘭会会員の皆様によりお見舞いを申し上げます。同時に、被災地域の一日も早い復興をお祈り致します。

会員の先生方におかれましては、被災地において被災者の救護、治療活動に日夜ご尽力頂いていることと存じ、また、震災の影響による困難の中で診療に従事されご活躍頂いていることと拝察致します。この未曾有の災害のもと、医療活動にあたりおられます先生方に心より敬意を表します。

日を追って被災の規模が如何に大きいものであるかが明らかになり、多数の被災者が今後長期にわたる避難生活を余儀なくされると思われます。このような状況の下、地域住民の命と健康を守る医療関係者の活動は何にも増して重要となっております。

東日本大震災被害に、できる限り支援 岩手、宮城、福島、茨城各県の芝蘭会会員の皆様へ

芝蘭会と致しまして京都大学医学部、附属病院と連携し、出来る限りの支援を致す所存ですが、芝蘭会として出来ることがございましたら何なりとお申し付け下さい。

また、もしも直接の被害をお受けになられた先生がいらっしゃいましたら、ご一報下さいますようお願い致します。

どうかくれぐれもお身体ご自愛のうえ、被災者、地域住民の診療活動にあたられ、この難局を乗り越えられますよう祈念申し上げます。

平成23年3月18日

社団法人 芝蘭会

会長 光山 正雄
副会長 中村 孝志
副会長 武田 隆男

報提供の場として開催しているものであり、今回で14回目となります。

当日は、中村病院長及び京都内科医会顧問の西先生の挨拶のあと、新任の高折教授、羽賀教授からそれぞれ挨拶・講演があり、続いて、宮本教授から「脳卒中地域連携について」として病院報告がありました。

その後、「急性期における京大病院と在宅医療をつなぐ」という全体テーマにより、高折教授から「地域医療としてのHIV感染症について」、陳教授から「呼吸不全(COPDを含む)について」、京都・たなか往診クリニック院長の田中先生から「生活を支える在宅医療」在宅移行を可能にするための「について」、それぞれ講演がありました。

また、引き続き開催された懇話会において、京大病院診療科長による各診療科紹介のあと、出席いただいた医療機関の先生方との意見交換が行われ、有意義なものとなりました。

京都大学医学部 校友会・教育研究支援基金

(KMS・FUND) だより

事務局
〒606-8501
京都市左京区吉田近衛町
京都大学医学部学生会館内
Tel.075-761-2467
Fax.075-752-1528
Mail-Address:
kyoto-kms-fund@office.
med.kyoto-u.ac.jp

学生会館本格利用 芳名碑を設置

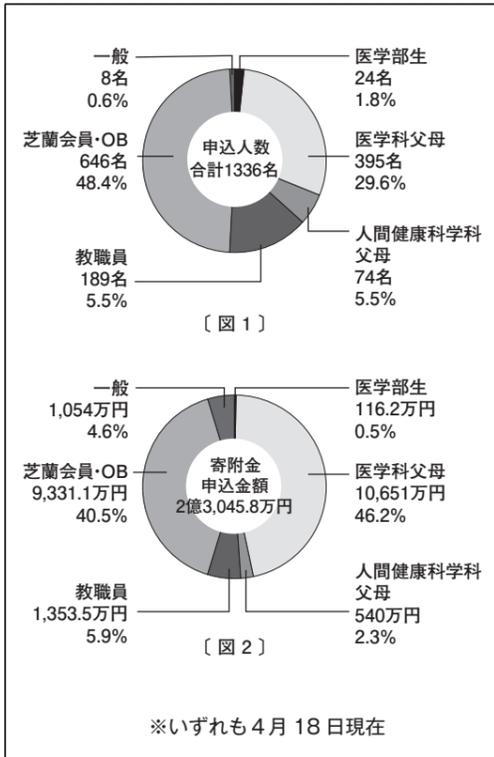
KMS-FUND 委員長

吉村 長久



念願の学生会館が完成し、いよいよ本格利用が始まりました。現在23のクラブが学生会館に部室を構えて活動しています。学生会館には、24時間利用可能な学習室や集会室、多目的室も用意されています。また、それぞれの部室の調度品もかなり整備されてきました。この学生会館建築は、成宮教授、中尾教授のご熱意により平成19年3月に発足した京都大学医学部教育研究支援基金(KMS・FUND)が行う教育研究支援事業の最初の大きな、そして象徴的な活動です。

UNLDに寄せられた医学部学生のご父兄の皆さま、教職員からのご寄附によってまかなっています。残念ながら、文部科学省はもちろんだ、京都大学本部からの金銭的援助はありませんでした。大学本部の考え方は、医学部のクラブ活動は全学のサークル活動・同好会活動と同様のものであり、大学が承認した正式のクラブ活動ではないということのようです。かなりの金額を本部から借入して「エイヤツ」と事業を始めることになってしまいましたので、今後5年間にわたって毎年かなりの金額を本部に返済しなければなりません。建物が完成したからお金の工面が済んだわけではありません。芝蘭会の先生方には今後ともさらに層のお力添えをお願い申し上げます。このように、学生会館はご寄附をいただいた皆さまのご厚意の賜物であり、多くのお願いを申し上げます。



寄附、より一層協力を 血液・腫瘍内科学 教授 高折 晃史



平成19年春にKMS・FUNDが設立されたから、4回目の春を迎えました。前号の芝蘭会報でお伝えしましたように、昨年11月14日には、念願の医学部学生会館の竣工を迎えることができました。このすばらしい学生会館において、医学部学生は勉学に勤しむと同時に有意義な課外活動を送り、早速その恩恵を享受しております。これもひとえに、校友会をはじめ、KMS・FUNDの重要性をご理解いただいた芝蘭会並びに教

員の方々の暖かいご支援の賜物と厚く御礼申し上げます。

血液・腫瘍内科学教授 高折 晃史

職員の皆さま方の暖かいご支援の賜物と厚く御礼申し上げます。

盛大 和やかに歓談



校友会主催の卒業・入学記念懇談会

3月24日(木)平成22年度京都大学卒業式は京都市勤業会館「みやこめっせ」にて、また医学部

200名が出席。また、4月7日(木)平成23年度京都大学入学式の後、芝蘭会館山内ホールにおいて校友会主催の「入学記念懇談会」が開催され、湊博医学部長を含む教授、新入生110名、父母など関係者136名、計250名の出席で行われた。

時計塔に京都の季節を感じて

校友会会員 市岡ようこ



東日本大震災により被災された皆様様に心よりお見舞い申し上げます。3月11日に発生した巨大地震は想像を絶する大津波を引き起こし、また原子力発電所の重大なトラブルを受けて目に見えない放射能の不安が広がっております。

拝啓
諸先生におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

去る三月十一日、東日本大震災が当地を直撃し、大津波により、多くの命が失われ、また、数え切れないほど多くの人々の生活基盤が失われました。この窮地に際し、数多くの先生方より暖かい言葉を頂戴し、また、数多くの救援物資を迅速に届けていただき、感謝無量でございました。京都大学医学部で学び研究してきたことへの感謝とその誇りの気持ちを新たに致しました。救援物資は、通院中の患者さん、近くの避難所で生活されている方、被害が甚大な山田町と宮古市の一部の避難所、および、当院の職員で有難く使わせていただきました。被災者の方々から感謝の言葉を頂戴しております。心より深くお礼申し上げます。ご多忙のところ、高橋良輔教授、池田昭夫准教授、中村道三先生、松崎茂先生には救援物資の手配で労をおかけし、改めてお礼申し上げます。また、先生方には、混乱している当方への直接のご連絡を避けていただくようお願いいたします。誠に申し訳なく、有り難く存じました。

震災への救援物資に感謝

宮古 岩見神経内科医院 岩見 億丈



20 mまで迫った漁船。引き潮で100 mに後退。雪です。

が十分でないため、医院の電話やファクスは復旧していません。さらに一カ月は必要とのことでした。

幸いにも、小生が運営する医院は約2mほどの浸水で済み、構造体は無傷です。津波到来直後は、一カ月間閉院だと腹を決めました。十二日、宮古地域の中核病院である県立宮古病院へ応援診療をすべく行ってみると、宮古病院の医師は震災当日より不眠不休で診療を行っていた。さらに長野県や新潟県からの災害医療チームも加わり、次々と救急車で運ばれてくる被災者を手早く処置され、救命救急処置については応援不要の状態でした。

自己犠牲の文化ききえず

流された患者さんや体調をくずした住民も救急室を受診しており、この状況での私の責務は可及的速やかに自院の診療を再開することであると理解し、三月十四日には診療

を開始することにしました。当院は、二階に診察室と受付があるため、カルテ、レセコン、および画像データは全く無傷です。三月十三日より当院職員、調剤薬局職員で清掃を始めましたが、ヘドロの量には閉口しました。全員泥まみれになりました。津波が来てから一m前後の津波を想定していましたが、患者さんに帰院避難してもらい、ガス等の栓を閉めた後は、慌てても仕方がないと思い、三階の会議室の窓から外を眺めておりました。じきに二百m



内部までヘドロが入ったMRI

ばなす術はありません。籠城せずに避難すればよかったと後悔しました。水門が閉まっていたため、プール状態になり、水が引いて外に出られるようになるまで七時間かかりました。津波が引いた後の診療所の一階内部は、ありとあらゆる物がひっくり返って泥を被り、漁具、ロープ、タイヤ、生活用品、灯油缶などが流れ込んでいます。玄関には大きな梁が流れ着き、これを男二人でどかして、車が住宅に突っ込んだり、親亀子亀のおんぶ状態になっているのを横目で見ながら避難所の小学校の体育館へ偵察にいきましたが、座る場所がないほど、多くの人々が避難しており、職員とともに医院でロウソクを灯し、夜を明かすことにしました。東北一帯が停電しています。空を見上げると、四十年以上も前に、生まれ故郷の田野畑村で見た美しい星々が、車の音もない静けさの中に輝いています。このまま電気がこない生活を続けてもよいという思いが心に浮かびました。

自宅は湾や開伊川から、1km以上離れており、津波は百m手前で止まりました。自宅の電気は震災三日目の夜に復旧し、携帯電話の充電ができるようになりました。ようやく各方面へ連絡ができるようになりました。テレビをつけて、あらためて宮古とその周囲の地域が如何なるのかわかりました。宮古市には北に田老地区というところがあります。十mの防波堤を津波が乗り越え、海拔三十九mの地点まで津波が到達し、過去に津波が到来した時と同じように町は壊滅しています。南隣の山田町も津波と火災で中心部は壊滅し、さらに南に位置する大槌町と釜石の鶴住居地区もほぼ全滅しています。建物が全壊した大半の土地で、住居の再建は不可能な無し無謀と思われれます。半壊以下で済んだ市街地と当院の復旧は少しづつ進行しています。津波に遭遇して初めてわかったことですが、鉄骨の建物が壊れなくても内部は泥だらけになり、内装

を解体し、泥や油を洗い流し、消毒と錆対策を行う必要があります。海水に浸かると多くの機材は錆びてしまい、洗って使えそうに見えた机なども一週間すると引き出しが動かなくなります。三月十九日になり、清掃業者が本格的に清掃を行い、さらに一週間後、復旧工事の下見が行われ、ようやく工事が始まったのは四月に入ってからです。働いてくれる各業者の従業員の中にも家を流された方が数多くいました。日常診療は、数日前から、震災直後の混乱から脱し、落ち着きを取り戻しております。諸先生にはご心配をお掛けいたしました。元気にしておりますのでご安心ください。

京都大学医学部の各方面より、ご支援を提供していただけた旨、お言葉をお礼申し上げます。そこでは無理な面もあるとは存じますが、当方よりの勝手なお願いを二つ申し上げます。

一、東北の経済復興への一助
国産品をなるべく消費していただきたいこと。東北の産品を使うことは、言うまでもありませんが、国産品を使用しているだけで、「風が吹くと桶屋が儲かる」式に東北にも経済効果が生じ、復興に勢いが出ます。建て前としての国策では輸入自由化は避けられないでしょうが、草の根運動として、しばらくは国産主義者を演じていただけませんかという事です。これを数年にわたり継続していただくと東北は元気になります。

二、医師の皆様へのお願い
医学教育、医療制度に関する変革
岩手県は、医師充足率が全国で最下位であり、特に盛岡以外の地域では足りないという言葉では表現できません。

県立宮古病院では、二十年の間に常勤医師数が半減し、耳鼻科、眼科、皮膚科、循環器内科、整形外科の常勤医師が不在となりました。循環器内科は偽医師事件が全国に報道された後に、常勤の医師が二名就任されましたが、救急急性期医療を行うための十分なマンパワーがなく、急性心筋梗塞の患者さんをヘリコプターや救急車で盛岡まで搬送している状態です。加えて、この夏には神経内科の常勤医も不在となる予定です。このような地域に片田舎で見られることではありますが、この度の津波の惨状は、疲れ切った医師を更に疲弊させています。宮古病院を十年前の活力ある病院へ戻さないで、この地域の住民の健康を全国レベルに保つことは非常に困難であると感じております。そこで、京都大学に縁のある諸先生にお願ひしたいことは、現在の研修医の制度を改革し、二年間の前期研修が完了した後に、医療過疎地区で一年以上働くことを後期研修の中で義務化することです。

初期研修中に、僻地に赴任しても、あまり助けにならないし、かえって負担が増えるだけになることでもあります。独力で次救急ができる体力のある若い医師が必要です。医療過

疎地域で働きたくない若い医師の気持ちも理解できないことはありませんが、医師としての真の教師は、病める人であるということをお忘れしてほしいと思います。

さらに、各学会の認定医制度でも受験資格に医療過疎地区での医療を一年以上行った者であることを追加すべきでしょう。要するに、都会で前期研修を行い、半人前になったら田舎で働いてもらうということです。都会の医療機関が自己犠牲を示し、田舎の医療機関を長期継続支援するという事です。かつての医局が行っていた地域医療への貢献と医学研究の両立というのを医局が実行する力はないように現状では思われます。

義理と人情の文化は消えかかっているのかもしれないが、自己犠牲の文化は震災での人々の姿を見ても消えていないと存じます。医療教育制度に関わっている先生方、よろしくご検討下さいますようお願いいたします。

生と死が背中を寄せて同居し、一メートル秒の違いが二者を分けています。

平成二十三年四月二十五日
岩見神経内科医院
岩見 億丈

京都大学神経内科同門会先生
京都大学医学部五十八年卒先生
京都大学芝蘭会会長先生

事業計画など5議案を承認



活発活発に議論する芝蘭会臨時総会

平成23年3月26日(土) 芝蘭会館別館に於いて芝蘭会理事会・評議員会および臨時総会が開催された。

議案は、(1) 会長、副会長、評議員の選任について、(2) (社)芝蘭

会の学事助成事業一覧(平成23年度)の改定について、(3) 建物、設備の老朽化に伴う修繕計画(案)について、(4) 平成23年度事業計画(案)及び収支予算(案)について、(5) 新公益法人

芝蘭会 理事会・評議員会・臨時総会

3月11日に発生した東日本大震災では同窓の皆さまからお見舞いの言葉をいただき真にありがとうございました。また、全国から災害派遣チームや医療救護チームにご参集いただき、厚く感謝申し上げます。

私事、10階の研究室は書棚が全部倒れて本と書類の海になってしまいましたが、幸い自宅にはさして被害がありませんでした。

県の救急医療協議会で災害担当副会長を務めており、宮城県沖地震への備えをテーマとして5年前に仙台で日本集団災害医学会を主宰した経緯もあって、発災以来県の災害対策本部に詰めてきました。現在は県庁16階に支援室を置かせていただいて、被災地のニーズを把握しながら医療救護活動と市・町役所、保健所の支援をしています。

予想を超える被災規模の大きさと職員の被災のために、また、通信手段や移動手段が制約され、自治体には緊急ファンドがないこと(初めて知りました)も相まって、県や市町の動きが遅く、1カ月たつてなお避難所の実態も的確に把握できていないのが実情です。このため、知人や団体、ユニセフ協会、関係企業などに協力を仰ぎながら、被災者救護や市・町の活動を援けるべく、現場の要請やニーズに迅速に対応するための活動をしています。

東日本大震災 カンパのお願い

これまでに、衛星電話、モデム付きPCの供与とセットアップ、避難所巡回用車両や原付、水タンク、トイレ清掃キャンペーン用具など、県・市が調達できない物品の供与やボランティアの派遣などを行ってきました。

この活動は発災後2週目ごろから原資なしで続けており、無償援助が得られないものは研究費を充てていましたが、被災地までのタクシー代やボランティアの食事、宿泊など、研究費で支弁できないものも多く、自費負担が重くなってきました。このため、支援室の活動に必要な諸費用に自由に使える財源を確保し、もし可能でしたらカンパのご協力をいただけると幸いです。

支援室の紹介を添付します。

<http://www.dcrc.tohoku.ac.jp/wiki/index.php>

カンパの受け入れ口座は下記のとおりです。

七十七銀行大学病院前支店 店コード 255
普通預金 口座番号 5341183 口座名義 国際保健上原鳴夫

ご多忙のところ恐縮ですが、ご協力いただけると幸いです。なにとぞよろしくお願い申し上げます。

上原 鳴夫

東北大学大学院医学系研究科国際保健学分野教授(昭和47年卒)
宮城県災害保健医療アドバイザー 災害保健医療支援室 代表

電話 090-7320-1794

〒980-8570 仙台市青葉区本町3-8-1 宮城県16階

災害保健医療支援室 電話 022-211-3165

(ホームページ) <http://www.dcrc.tohoku.ac.jp/wiki/index.php>

芝蘭会 通常総会のお知らせ

平成23年度通常総会を下記のとおり開催いたします。

開催には会員の10分の1以上の出席(委任状を含む)を要しますので、お手数ながら、ご出席願えない場合は、委任状に各議案に対する賛否をご指示の上記名捺印願ひ、総会日の5日前までにご返送くださいますようお願いいたします。

- 日時 平成23年6月18日(土) 午後3時~
場所 京都市左京区吉田牛ノ宮町11-1 芝蘭会館 別館
- 議案 1) 平成22年度事業報告及び収支計算並びに財産目録について
2) 平成23年度事業計画及び収支予算について
3) 副会長、評議員の選任について

制度への移行についての5件で、議案(1)については、光山正雄会長、中村孝志副会長の平成23年3月31日付の辞任に伴い、後任に湊長博氏、三嶋理晃氏を平成23年4月1日付で選任することが承認された。また、横田道夫評議員(静岡)、山本泰朗評議員(高知)、坂口志文評議員の辞任に伴い、後任に島本光臣氏、森惟明氏、岩田博夫氏を平成23年4月1日付

で選任することが承認された。議案(2)については、医学部学生の海外研修助成金を5万円から10万円に改定するなど、原案どおり承認され、議案(3)についても、原案どおり承認された。議案(4)については、医学教育活動などへの助成や学生のクラブ活動への助成、芝蘭会館別館の宿泊利用の今後の展望などについて、活発な議論の上、原案どおり承認され、

議案(5)についても、原案どおり承認された。議案の審議終了後、光山会長から「京都大学医学部教育研究支援基金(KMS・FUND)」の寄附申込状況についての報告と、平成23年3月11日に起きた東日本大震災に被災された岩手県、宮城県、福島県、茨城県の芝蘭会会員にお見舞いの手紙を出したことの報告があり、了承された。

人事異動

発令年月日	氏名	異動内容
H23.1.31	宮原 亮	辞職 器官外科学呼吸器外科学講師より京都市立病院呼吸器外科副部長へ
H23.2.1	北条 雅人	昇任 病院助教より脳病態生理学脳神経外科学講師へ
H23.2.16	園部 誠	採用 病院特定助教より器官外科学呼吸器外科学講師へ
H23.3.30	中村 孝志	辞職 外科学整形外科学教授より京都医療センター院長へ
H23.3.31	石崎 達郎	辞職 健康管理学健康情報学准教授より東京都健康長寿医療センター研究部長へ
H23.3.31	藤井 隆夫	辞職 内科学臨床免疫学准教授より同特定准教授へ
H23.3.31	西山 博之	辞職 外科学泌尿器科学准教授より筑波大学大学院人間総合科学研究科教授へ
H23.3.31	山内 浩	辞職 脳機能総合研究センター准教授より滋賀県立成人病センターへ
H23.3.31	伊藤 宜	辞職 外科学整形外科学講師より同特定准教授へ
H23.3.31	兼松 明弘	辞職 外科学泌尿器科学講師より兵庫医科大学講師へ

発令年月日	氏名	異動内容
H23.3.31	田村 尚久	辞職 内科学内分泌・代謝内科学講師より康生会武田病院部長へ
H23.3.31	波多野武人	辞職 脳病態生理学脳神経外科学講師より福井赤十字病院脳神経外科部長へ
H23.3.31	岡田 俊	辞職 脳病態生理学精神医学講師より名古屋大学医学部附属病院講師へ
H23.4.1	小西 靖彦	採用 済生会神奈川県病院院長補佐より医学教育推進センター教授へ
H23.4.1	古谷 寛治	採用 国立遺伝学研究所助教より放射線生物研究センター突然変異機構研究部門第二分野講師へ
H23.4.1	岡本 晋弥	採用 大津赤十字病院小児外科部長より外科学肝胆膵・移植外科学講師へ
H23.4.1	高木 康志	採用 福井赤十字病院より病態生理学脳神経外科学講師へ
H23.4.1	森本 尚樹	昇任 病院助教より感覚運動系外科学形成外科学講師へ
H23.4.1	神波 大己	昇任 病院助教より外科学泌尿器科学講師へ
H23.4.1	八十田明宏	採用 病院特定講師より内科学内分泌・代謝内科学講師へ

会員訃報 (敬称略) 謹んでご冥福をお祈りいたします。

伊藤 賀祐 (昭和11年卒) 平成23年4月3日 ご逝去	小川 譲次 (昭和25年卒) 平成22年11月6日 ご逝去	谷村 孝 (昭和31年卒) 平成22年10月13日 ご逝去
吉岡 忠夫 (昭和12年卒) 平成23年3月28日 ご逝去	梅尾 正昭 (昭和25年卒) 平成22年8月24日 ご逝去	井上 欣也 (昭和34年卒) 平成20年12月30日 ご逝去
鈴木直五郎 (昭和16年卒) 平成16年9月30日 ご逝去	林 三郎 (昭和25年卒) 平成23年4月8日 ご逝去	三好 啓介 (昭和34年卒) 平成22年8月10日 ご逝去
広戸幾一郎 (昭和17年卒) 平成22年9月24日 ご逝去	中島 重勝 (昭和27年卒) 平成22年10月2日 ご逝去	滝本 保 (昭和34年卒) 平成23年2月26日 ご逝去
古川 牧一 (昭和17年卒) 平成22年9月5日 ご逝去	安藤 正昭 (昭和28年卒) 平成23年4月12日 ご逝去	伊藤 和彦 (昭和36年卒) 平成22年12月17日 ご逝去
中嶋 健一 (昭和17年卒) 平成23年2月14日 ご逝去	島田 恵年 (昭和28年卒) 平成22年12月12日 ご逝去	石井 恵三 (昭和38年卒) 平成22年12月15日 ご逝去
白木 茂 (昭和19年卒) 平成21年9月 ご逝去	中島 襄 (昭和29年卒) 平成22年9月7日 ご逝去	柳沢 悦子 (昭和52年卒) 平成23年2月8日 ご逝去
波田 重道 (昭和22年卒) 平成23年1月24日 ご逝去	長谷川 保 (昭和29年卒) 平成7年8月15日 ご逝去	仁科 博子 (教室会員 解剖3) ご逝去
池田 太郎 (昭和23年卒) 平成22年9月24日 ご逝去	安藤 博章 (昭和30年卒) 平成23年2月19日 ご逝去	仁尾 尚 (教室会員 衛生学) 平成23年2月16日 ご逝去
中本 弘 (昭和23年卒) 平成22年11月9日 ご逝去	岡部 忠夫 (昭和30年卒) 平成22年11月24日 ご逝去	二村 美而 (教室会員 外科学) 平成15年5月3日 ご逝去
岡田 瑞夫 (昭和24年卒) 平成23年2月21日 ご逝去	武田 惇 (昭和30年卒) 平成23年4月4日 ご逝去	上村 孝夫 (教室会員 産婦人科) 平成22年10月2日 ご逝去
後藤 健治 (昭和24年卒) 平成23年3月1日 ご逝去	金光 修 (昭和30年卒) 平成23年1月12日 ご逝去	

- 芝蘭会事務局
 事務局長 山田 均
 総務課長 秋山和美
 管理課長 松本 悼
- 芝蘭会報編集委員会
 委員長 中尾一和
 委員 斎藤信雄、岩田征良、豊國伸哉、山田圭介、園部 誠、阿部 恵
- 芝蘭会雑誌部
 顧問 中尾一和
 部員 植木一仁、武井玲生仁、水野裕基、福永有伸、畑玲央(以上6回生)
- 芝蘭会事務局長
 将史(以上2回生)
 真辺諒、森山太陽、鶴田井谷駿史(以上4回生)
 前田峻宏、宗宮伸弥、柳山田直生、畑野翔太郎、橋本健太郎、中村有輝、島將夫(以上5回生)
 合田直樹、福田宗寛、勝生

原稿募集

芝蘭会報は、会員の皆様の情報交換・意見発表の場です。支部活動、クラス会、会員の著書の紹介(自薦・他薦)及び医学・医療等に関するご意見等を寄稿ください。なお、原稿の採用及び掲載時期については、編集委員会でご決めさせていただきます。芝蘭会報 編集委員会

●事務局から●

平成17年4月からの「個人情報保護法」の全面施行により、個人情報の取扱いに厳しい制約が課せられました。つきましては会員の連絡先等のお問い合わせは、必要理由等を明記の上、郵便またはFAXにより事務局までご送付ください。電話でのお問い合わせにはお答え致しかねますのでご了承ください。(FAX 075-752-4015)